



# GALLERY



「進取」備中ちぎり絵  
山本 静子さん(御前町)



「猪突猛進」水墨南画  
石井 久雄さん(津川町八川)



「紅葉の豪溪」写真  
秋葉 登志子さん(有漢町有漢)



「キルトのベスト」手芸  
森本 恵美子さん(成羽町下原)



「お人形さん」手芸  
佐々木 美保子さん(備中町長屋)

## 作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など  
 【作品】絵画、工芸品、まちの風景写真など
- 自作の未発表作品で、一人一作品とします。
  - ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。  
 (撮影が困難な場合は、ご連絡ください)
  - 住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。
- ※締め切り 掲載号の前月の末日(必着)

- 問い合わせ・送り先  
 〒716-8501 (住所不要)  
 高梁市役所企画課公聴広報係 (☎②0210)  
 Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp
- ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。  
 ※提供いただいた写真等は返却できません。

### 短歌

手書きせる歌集やうやく整いぬめくれば香き想いふつづ(敬称略)

暖かい冬の陽射しに夫婦たごいて時は静かにゆつたりと過ぎる  
小野はる恵(原田南町)

明けぬまに登り高山に雲海が雄大な広がり冷えこむ季節に  
亀石恵美子(川上町仁賀)

鈴生りの黒豆叩けばコロコロとお節の一品生れ福まねく  
平 初音(高倉町田井)

ひとしきり騒ぎし群は飛び去りて遠く聴こゆるヤマガラの声  
榊上 秀雄(備中町西山)

### 俳句

まん月や霜光冷え師走かな  
結城 成子(宇治町宇治)

### 川柳

初の客無言でとび込む年賀状  
藤井タツ子(備中町西山)

## お笑い川柳マンガ

鈴木 茂實さん (川上町地頭)



子沢山、年始の客が慌ててる

※今月号から、鈴木茂實さんの「川柳マンガ」をご紹介します。

## 地名とふるし



### 二十七 田原

「田原」は、成羽川の上流、田原ダムのある備中町惣田付近で、西から流れ出る東城川(帝釈川)と、北から坂本断層線谷といわれる坂本川の二つの支流が成羽川へ合流する場所から坂本川に沿って上った付近に見られる地名であります。

左岸の成羽町側に「中野田原」、その下流に「布寄田原」、川を隔てて(右岸)備中町側に「田原上」「田原中」「田原下」の集落が旧新見街道沿いにあります。

この地域は、標高三五〇mから六〇〇mの準平原面(侵食小起伏面)を侵食して流れ出る坂本川に沿った断層谷のわずかな平地と山麓の斜面を中心とした地域で、「田原」は近世の「東油野村」に属していました。新成羽川ダムや田原ダム付近の地形は、穿入蛇行(山地で峡谷を成したところで川が曲流を繰り返すこと)の激しい幼年期の地形だった場所、河谷部から急峻な坂道を登り切ると「野呂」と呼ばれる広い高原上の村が広がり、古くからの産業の中心であり生活の場所でした。

平安時代の「和名抄」に出てくる「下道郡湯野(由乃)郷」は、現在の東・西油野付近が遺称地といわれていて、古くから西油野を中心とした高原上の「野呂」が中心に開けていたことがわかるのです。

備中町「田原」は東油野村の河谷部にある集落で「正保備中国絵図」には、現在の田原橋の上手のところに「是迄川船上」と書かれていて、近世に田原惣田の河岸(江戸時代河川などに設けられた船着場)まで高瀬舟がさかのぼっていたことが記されています。この田原河岸には問屋や小売商が集まり年貢米の輸送、特産物の楮、漆、米、鉄、薪炭などの搬出で賑わい、「野呂」からの道が集まって市場機能をもつ谷口集落として「田原」が発達したのです。このように、河岸場の問屋が繁昌するのは後背地である「野呂」(東油野・西油野・西

山など)の広狭によって決まるのです。「西油野では年貢米を東油野の「野呂」から急な坂道を河岸場の「田原」まで人馬で運び出し、高瀬舟で玉島まで輸送していました」(「宝暦一〇年西油野村明細帳」=「備中町史」)。「河岸」と「野呂」を結ぶ道は、この地域の人々の生活を支える主要路であり、また、高瀬舟の河岸場へ通じる道の発達は成羽川の水運による輸送を促し、高瀬舟の船路の開発など河川交通の発達を促したのです。明治時代になると、車輛(人力車・馬車・大八車など)の発達が見られ、そして、学校などの施設が谷口の集落に移り、大正、昭和になって自動車交通の発達とともに、経済の中心が「野呂」から川沿いの河岸に移ったのです。

また、明治四一年(一九〇八)には、吉岡鉱山が盛況となり、三菱合資会社は「田原下」から成羽古町まで吉岡鉱山専用軌道を開通させ、「田原」は人車軌道の終点として、しかも坂本への馬車輸送の起点となって繁盛したのです。大正時代になると「客トロッコ」や「馬トロッコ」も開始されたのです。現在でも「田原」から下へ成羽川左岸に「トロッコ道」が残されています。

現在「田原」の町並みには昔の面影はありませんが、東油野村庄屋を務めた田原河岸問屋・丹下小十郎(元倉屋)の墓が残っていて、当時の繁栄ぶりを思わせる墓碑銘が残されています。

「田原」という地名の意味は「その地域において、大切で広い平坦地」を意味することが多く、川沿いの平坦地で、草などが生い茂るような場所が多く見られる地名なのです。すなわち「水田の多い平坦地」を意味する自然地名の一つなのです。(文・松前俊洋さん)



北から見た「田原」遠望